

遊んで学ぼう外来種

岩井涼・永藤小珀・谷侑樹・森亮羽・森わかば
(兵庫県立御影高等学校 総合人文コース2年 地域探究プロジェクト2班)

1. 研究の背景

近年、外来生物法の改正などにより外来種問題について耳にする機会が増えたが、班員の中で実際に外来種による被害を受けた経験がある人はおらず、本当に外来種は人間にとって悪影響なのかを疑問に思い、研究をはじめた。この研究における「外来種」とは人為の影響によって本来の生息地域から、元々は生息していなかった地域に入り込んだ生物のことを指す。外来生物法において「外来生物」とは国外から移動してきた生物のみを指すが、「外来種」とは国外から移動してきた生物と国内で移動している生物の両方を指す。

2. 認知度調査の実施

事前調査として神戸市環境局と外来生物展示センターへインタビューを行った。その結果、外来種は人間よりも在来種に悪影響を与えていることがわかった。この事前調査を踏まえて、外来種の認知度調査を御影高校生と近隣の小学生を対象に行った。アンケートをしている時、大人・高校生と小学生の間で回答の方法の違いに気がついた。高校生や大人は「ニュースで見た」や「授業で習った」など何らかの自信を持って回答しているのに対して、子どもたちは生物そのものを知らず、「見た目が怖い」、「名前が外来種っぽい」などと話しながら、ほぼ勘で答えていた。以上のことをふまえて、「小学生の子どもたちに外来種についてもっと知ってもらうために高校生にできることは何だろうか」というリサーチクエスチョンを立て、外来種に関するワークショップを開催することにした。

3. ワークショップの実施

小学生に、楽しく学んでもらいたかったので、絶滅危惧種を守る WWF (World Wide Fund for Nature) という機関が出している「ピンチくん」というカルタを参考に、もっと簡単でもっと身近な神戸に生息している外来種のカルタをオリジナルで作った。

ワークショップの内容としては、まずクイズしたのち、外来種に関するガイダンスをしてからカルタで遊び、最後にもう一度クイズを回答してもらった。クイズを2回行ったのはカルタをする前後で子どもたちの知識量の変化を見るためである。このようなワークショップを神戸市中央区のまちライブラリーと東灘区の浜御影児童館の2箇所で開催していただいた。子どもたちの数は、まちライブラリーでは2~5人、浜御影児童館では約60人だった。所要時間は35分間であった(図1)。



図1 まちライブラリーでのワークショップの様子

4. ワークショップの効果に関する結果と考察



図2 ワークショップ前後でのクイズ正答率の変化

グラフの青色の部分は正答率を表し、オレンジ色は誤答率を示す。①はワークショップ前、②はワークショップ後のクイズ正答率を示す。

ワークショップ前に実施したクイズ正答率は62.6%で、ワークショップ後のクイズ正答率は82.9%であり、ワークショップを実施することで約20%の正答率が上昇した。また、設問別の正答率もほぼ全てで上昇が見られた。この結果より、カルタによるワークショップは小学生の子どもたちに外来種の知識を向上させる手段として有効であると考えられる。またカルタを実施している時、小学生たちは楽しそうな様子であった。このことからカルタは楽しく学んでもらうための手段として有効であると言えると考えられる。

5. 今後の展望

今回のワークショップに加えて、外来種の外見や色の特徴を伝えることができる「ぬり絵」と、外来種が生息地を移動した物語と図鑑のページを作り、外来種になった背景を伝える「絵本」を取り入れることを考えている。この新たなワークショップによって、より外来種について詳しく理解することができるか検証していきたいと考えている。